

「ハノイ国家大学サマースクールプログラム参加報告書」

京都大学文学部3年 城谷育子

- ① 私は今まで、国際理解というとヨーロッパやアメリカといった“先進国”に目を向けがちでした。しかし今回ベトナムという同じアジアで“新興国”の国に2週間滞在することで、屋台やマーケットでの売買が盛んな生活をしているような国々の良さ、というものを感ずることができました。先進国には見られない、お店の人と客の当たり前のコミュニケーションに、心が温まりました。
- ② ベトナムでの2週間の滞在を通して、本当にたくさんのことを経験しました。
- 1つ目は、体調をひどく崩したことです。水が変わればお腹を壊す、とよく言いますが、まさにその通りです。私はベトナム滞在4日目に、嘔吐と下痢を発症しました。氷の入ったデザートを食べたのが原因だったと思われる。その後一週間、食欲もなく体調が良くならなかったため、International SOS という国際病院へ行きました。そこで診察してもらい（お医者さんとは英語でのやりとりでした）、薬を出してもらいました。おかげで食欲も戻って大分体調が回復し、残りのベトナムでの滞在期間を元気に過ごすことができました。この経験で学んだことは、海外、特に新興国での身の施し方です。（生水に気を付ける、屋台などの食器はきちんと拭いてから使う、病院へ行く場合どのような手順を踏めばよいか、など。）そして、一緒に行っていたメンバーの優しさを非常に感じました。食欲のない私のために食事のメニューを気遣ってくれたり、病院に必死で連絡をとってくれたり、と感謝してもしきれません。
- 二つ目は、交通に関することです。ベトナムは、バイクを中心に交通量が非常に多く、信号がほとんどありません。歩行者は道路を横断するときに、たくさんのバイクや車が走っている中を渡って行かなくてはならないのです。ベトナムに行った当初、この光景を目の当たりにしたときは、「どうしてこんなにも秩序がないのだろう」と疑問しか感じませんでした。道路を渡るのは命がけだし、クラクションはうるさいし、排気ガスで空気は汚いし、もううんざりしていました。しかし、こういった環境に身を置くことで、日本の交通がいかに整備されているか、そして価値観の違いに気づかされました。日本には信号があつて、皆交通ルールを守るのが当たり前ですが、ベトナムにはそもそも交通ルールというものほとんど存在せず、それが“当たり前”なのです。“当たり前”が違うという、日本にいただけでは気づきにくいことを肌で実感することができました。また、少年がおばあさんの手を握って道路を渡る、という光景を目にしました。この二人は見ず知らずの関係ですが、ベトナムではこういったことがよくあるそうです。このような点に、年上の人を敬うという儒教の精神が表れていて、素晴らしいなと感じました。
- ③ プログラム内容は、大きく分けて3つありました。1つ目は、ベトナム語の学習です。まずベトナム語の発音は、私たち日本人にとってとても難しかったです。ベトナム在住の日本人の先生が指導してくださったのですが、“横隔膜を震わせる”のがポイントのようです。単にベトナム語だけを学ぶのではなく、ベトナムの経済、社会、歴史、など様々なことを学びました。またベトナム語では、人を呼ぶときに、その人が自分より年上か年下かによって呼び方が変わってきます。これはとても新鮮で、レストランなどで店員さんと呼ぶときに「あの方は自分より年上かな？」などと考えながら呼んでいました。こういった点に、儒教の年上を敬う精神が見られて、文化と言語はリンクしているのだな、と強く感じました。
- 2つ目は、現地の大学や高校での日本語の授業への参加です。現地の学生の会話の話し相手になったり、実際に前に立って授業を行ったりしました。私はなにより、現地の学生の日本語の上手さに驚きました。日本語は世界の言語の中でも難しいと言われているのに、英語の他に第2外国語としてこんなにも習得しているのか、と思いました。また、日本語を教える立場になってみて、“正しい日本語”を自信を持って言えないことに気づきました。毎日使っている言葉なのに、まだまだ習得できていないのだな、と感じました。
- 3つ目は、日本文化に関するプレゼンテーションです。私たちは「日本人の美意識」という大きなテーマを決め、その中で私は「枯山水からみるわびさびの精神」というテーマで発表をしました。「わびさび」を説明するには、どうしても専門用語が多くなってしまったため、それを簡単な日本語にして説明する、というのが難しかったです。テーマ自体が抽象的だったため、内容が難しめの発表になってしまいましたが、少しでも「わびさびの精神」が伝わったかな、と思っています。
- ④ 私は今まで、海外で働く、ということを全く考えたことがありませんでした。しかし、今回のプログラムを通して、「海外で日本をより知ってもらうために働きたい」と感じるようになりました。まだ漠然としていますが、これから本格化する就職活動を通して具体的なビジョンにしていきたいです。